

子どもが楽しむフランクフルトの博物館

井ノ口 淳三*

要 旨

フランクフルト・アム・マインにある博物館の中から子どもの楽しむ博物館を中心にしてそれらの特徴について考える。

もじゃもじゃペーター博物館では、ペーターに関するさまざまな出版物を見ることができた。挿絵のちがいが興味深い。ペーターに関連するグッズの展示にも意義がある。

ゼンケンベルク自然博物館では恐竜の展示に圧倒された。大蛇アナコンダに飲み込まれる動物の展示を見ると、博物館の教育的役割について考えさせられる。

子ども博物館を訪ねると、展示を中心としない博物館のあり方を理解することができるだろう。

ゲーテの生家では、著名人が生まれ住んだ家を一般の人々に公開することの大切さに気がつく。

コミュニケーション博物館では、企画展に工夫がなされており、情報を操作する力に眼をむけることの重要性を教えてくれる。

このようにそれぞれの博物館の持つ特徴から学ぶことは大きいものがある。

キーワード

もじゃもじゃペーター博物館、ゼンケンベルク自然博物館、子ども博物館、ゲーテの生家、コミュニケーション博物館、コメニウス

1. もじゃもじゃペーター博物館

ドイツのフランクフルトには子どもの楽しめる博物館がたくさんある。それらの中から2014年2月に訪ねた博物館の特徴を幾つか紹介する。最初は、もじゃもじゃペーター博物館 (Struwelpeter Museum) である。

もじゃもじゃペーターとは、もともと医師のハインリッヒ・ホフマンが、1844年のクリスマスに自分の子どもへのプレゼント用にした絵本の主人公である。日本でも伊藤庸二訳『ぼうぼうあたま』(1936)として翻訳されているように、1845年の初版以来世界各国で版を重ねている。

私がこの博物館を知ったのは、山名淳(2012)による。山名の著作には記されていないが、フレーベルの幼稚園が、政府によって閉鎖を命じられた際に、デー

スターヴェークがフレーベルを励ますために書いた風刺コントの中にシュトゥルーヴェルペーターの絵本のことが書かれている。それを教育史の授業で紹介したことがあった。

そのこともあって、山名の著作を読んだ時、いつかこの博物館を訪ねたいと思ったのである。

絵本や児童文学作家の博物館は、ドイツだけでもたとえばゲッティンゲン近郊にあるエバーゲッツェンのウィリアム・ブッシュ博物館やドレスデンのケストナー博物館などいろいろあるが、作品の主人公を中心とした博物館は少ない。私の訪ねた場所では、ブリュッセルのタンタン博物館、ユトレヒトのミッフィー博物館、ロンドンのシャーロック・ホームズ博物館、ストックホルムにある長靴下のピッピのテーマパークくらいで

* 追手門学院大学国際教養学部

ある。

さて、フランクフルトに到着した翌日朝一番にもじゃもじゃペーター博物館をめざした。地下鉄を降りてメンデルスゾーンやシューベルトなどの有名な作曲家の名前のついた通りを歩いて行くと、住宅街の一角に小さな案内板を見つけることができた。

3階建ての建物の1階が受付とショップ、展示室そして奥には催しのできる小さなスペースがある。2階と3階には展示室が3室ずつあるが、それぞれの1室は作業のできる部屋としてテーブルとイスが配置されている。この日は日曜日だったので、小学校低学年くらいの子どもたちが7人集まって誕生会をしていた。このような共同の場所があれば、家庭の負担も少ないだろう。



もじゃもじゃペーター博物館

さて肝心の展示であるが、予想通りもじゃもじゃペーターに関するさまざまな出版物を見ることができた。挿絵にもそれぞれ特徴があり、とても興味深い。作者の経歴の紹介も展示されているが、眼を奪われるのはペーターに関連するさまざまなグッズである。トランプ、すごろく、着せ替え人形など子どもが遊ぶものから食器類や幻灯機など家族で楽しめるものまで実に多彩である。

実は私も絵葉書、ポスター、肖像画、彫像、ボールペン、ピンバッジ、ビールやワインのラベルなどコメニウスに関連するグッズを収集している。これまでにチェコ、ドイツ、ハンガリー、オランダなどで8箇所のコメニウス博物館を訪ねたが、それらを展示している所はな

い。ショップで販売しているようなものを展示すべきではない、という方針をとっているものと推測するが、メダル、切手、紙幣など、現在では入手できないものに限定して展示しても良いのではなかろうか。なぜなら、コメニウスのメダルや彫像ばかりを収録した本が何種類も出版されているからであり、普及や受容の状況を知る上でも意義があると考えられるのである。

もじゃもじゃペーター博物館では、現在ショップで販売しているものはもちろん展示していないが、今では手に入らない関連グッズは展示している。主人公に関係したものに興味を持つのは、ファンの常である。周辺のものへの関心から学習が始まることもある。この博物館を訪ねていろいろな展示を見たことをきっかけにして、絵本を読もうとする子どももいるかも知れない。私は、この博物館の展示方針に共鳴する。

フランクフルト市内の交通機関が乗り降り自由、主な博物館や美術館が半額になるフランクフルト・カードの2014年の図柄に、もじゃもじゃペーターが採用されている。これは、ペーターが市民に親しまれている主人公であることを示している。このカードもそのうち展示されることになるのであろうか。

2. ゼンケンベルク自然博物館

もじゃもじゃペーター博物館を出て、ベートーベン通りやシューマン通りの方へ5～6分ほど歩いて行くと、大通りの向こうに巨大な恐竜が見えてくる。それがゼンケンベルク自然博物館 (Senckenberg Naturmuseum) の目印である。休日なので家族連れも多いが、大人だけで来ている人も少なくない。チケット売り場には行列ができるほどだった。

中へ入ると、一番の人気はやはり恐竜の模型である。骨格が見事に再現されていて圧倒される。館内に入ってすぐの場所に展示されているということもあってか、常に見学者に囲まれている。哺乳動物や鳥類の化石も保存状態が良い。毛が残っている化石は珍しいのではないだろうか。

火山の頂上から噴煙が上がるジオラマの周りにも多くの参観者があったが、ぎょっとしたのは、南アメリカに生息する9メートルの大蛇アナコンダが動物を飲み込んでいる様子の展示である。アナコンダは、魚類、



人気のある恐竜

両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類など何でも食べるが、この展示では動物の上半身が飲み込まれ、下半身を人目にさらしているのである。とてもリアルに再現されており、生々しさが伝わってくる。実にインパクトのある展示である。



動物を飲み込む大蛇アナコンダ

もし、日本の博物館がこれと同じものを展示すれば、どのような反響を引き起こすだろうか。おそらく残酷であるとか、教育的配慮が必要だ、などという批判的ないしは慎重な意見が出されるにちがいない。

けれども、ゼンケンベルク博物館では目につく場所に堂々と展示されており、子どもたちも興味深げにみつめている。親が説明している様子も見かけた。人間も大蛇の犠牲になることがあるという事実、自然界において日常的に展開されている営みをこの展示は伝えている。

この博物館では定期的に子どものための催しを企画している。3歳から5歳までとか、4歳から6歳まで、7歳から10歳までなど、年齢を考慮したきめ細かいプログラムを提供している。日本の博物館で3歳児を対象にした企画をしているところがどれだけあるだろうか。このような日常的な取り組みをふまえてアナコンダの展示が行われていることを理解すべきであろう。見たくない子どもに対して無理に見せているのではない。大人の過剰な「教育的配慮」を優先させて良いのだろうか。博物館の教育的な役割とは何かについて改めて考えさせられる展示である。

3. 子ども博物館

自然博物館の最寄り駅である地下鉄U6線とU7線のポッケンハイマー・ヴァルテ駅から、中心街の方向へ3つ戻りハウプトヴァッヘ駅で降りると、その上に子ども博物館（Kinder Museum）がある。

この博物館ではいわゆる「展示」を見ることは期待できないだろう。展示もないわけではないが、それは普通の大人からすればガラタやゴミとしか思えないものである。たとえば、ビンのふたとか薬の空箱、クリップなどがケースの中に整然と並べられている。これではモダン・アートとして好意的に受け取るわけにもいかないのではないだろうか。

ここで見ることのできるの、子どもが何かの活動に熱心に取り組んでいる姿である。つまり子どものワークショップを中心とする博物館なのである。この日は3人の子どもたちが毛糸を使って飾りを作っていた。めざすべきお手本があるわけではなく、どのような色のいかなる形になっても良いのだが、子どもが自分で思うように進められない場合には、大人がアドバイスをしていた。

フランクフルトの一等地にあることや学芸員の人数も少なくない様子なので、入館料は案外高い。「子ども博物館は、博物館の革命児である」（日本教育メディア学会、2013）と書かれているのを読んでも、そのイメージが具体的に浮かばなかったのであるが、ここに来てその意味をととてもよく理解することができた。オリジナルのもの、貴重なものを展示する博物館とはまったく別の姿がそこにあった。膨大な展示品を誇る自然博

博物館とは対照的であるが、この子ども博物館もやはり博物館なのだ、と納得できた。



子ども博物館の活動

4. ゲーテの生家

子ども博物館から歩いてさらに2つの博物館を訪問した。1つはゲーテの生家（Goethe Haus）である。ここを訪ねるのは3度目であるが、子どもの姿を見たことは1度もない。それなのになぜここを紹介するのかと言えば、ゲーテは、自然博物館内の博物学史の展示コーナーにダーウィンやヘッケルと並んで紹介されているように、自然科学者としての業績も認められ、文学史のみならず博物学の歴史にも名前をとどめる人だからである。

ドイツにはデュッセルドルフやワイマールにもゲーテ博物館があるが、フランクフルトの博物館は、ゲーテの生家である。

有名人の生家が博物館となって一般の人々に公開されている例として、ザルツブルクのモーツァルトやボンのベートーベン、ジュネーヴのルソー、シュトゥットガルトのヘーゲルの生家などが有名である。マドリッド近郊のアルカラ・デ・エナーレスにあるセルバンテスの生家やアムステルダムのレンブラントの住居なども訪ねたことがあるが、生家や住居跡を見ると、それらが町のどのあたりの場所にあり、どの程度の大きさの家であったのかを知ることができる。そこから当時の暮らしぶりもある程度推測できるのである。伝記の行間を読み取るために、ゆかりの場所を訪ねることは大切な作業である。

ところで、ゲーテが子どもの頃に親しんだというコメニウスの『世界図絵』の展示が今回は別のものに差し替えられていたのは残念であった。かつて博物館に隣接する図書館でゲーテの父親の蔵書を調べたところ1746年版と1755年版とがあり、ゲーテの生年から1755年版を愛読したと推察したことを思い出す（井ノ口、2002）。

ゲーテのように多方面で活躍した人の全体像を限られたスペースで紹介するのは難しい課題であると思うが、生家の内部を公開することによって、その制約を幾らかでも克服できるように思う。



ゲーテの父親の書斎

5. コミュニケーション博物館

ゲーテの生家は中心部にあり、そこからレーマー広場を通り抜けるとメイン川に出る。対岸には幾つもの博物館や美術館が並んでいて、博物館通りと呼ばれている。それらの中からコミュニケーション博物館（Museum für Kommunikation）を訪ねた。

ラジオやテレビなどメディアの機器、郵便ポストや電話機などの通信機材を古いものから順に並べるといふ展示の手法はオーソドックスなもので、ベルリンのコミュニケーション博物館と同様である。

館内の一部屋では子どものためのワークショップも行われており、4歳から参加できるようだが、それに参加していない子どもたちに人気のあったのは、ダイヤル式の電話で通話のできるコーナーである。今の子どもはダイヤル式の電話など見たこともないのだろう。電話を使わなくても声の聞こえるほど近くの電話機に

何度もかけて、あきずに遊んでいた。

大人が足を止めて見ていたのは、わずか数年間の携帯電話の変貌を伝える展示である。また、映画の中で電話をかけているシーンばかりを集めたパネルには学芸員の工夫が感じられた。



電話で遊ぶこどもたち

工夫といえば、2013年10月から開催されていた「統制からの離脱？ 大規模な監視世界における生活」と題した企画展は、なかなか興味深いものであった。私たちの日常生活が、多くの規制によって方向づけられていることを多面的に示す内容で、監視カメラが特定の人物を継続して追いかけている様子も知ることができた。ある風刺画の展示には、「思考クラブ」の会合の様子が描かれており、「今日の会議で重要な問題は、どれだけ長時間考えることが許されるかだ」と書かれている。しかし、彼らは全員くつわで口をふさいでいる。とても1820年の作品とは思えないものだった。常設展よりも企画展の方に多くの人が集まっていたのも当然であろう。

以上見てきたように、午前10時の開館から午後6時の閉館まで1日に5つの博物館を訪ねたが、それぞれに特徴があり、博物館のあり方についていろいろな角度から考えることができた。

引用・参考文献

井ノ口淳三(2002)「ドイツにおけるコメニウスゆかりの場所をたずねて」日本コメニウス研究会『日本のコメニウス』第12号

伊藤庸二(1936)〔2006〕『ほうほうあたま』銀の鈴社

日本教育メディア学会(2013)『博物館情報・メディア論』ぎょうせい、32ページ

山名淳(2012)『「もじゃペー」にくしつけを学ぶ―日常の「文明化」という悩みごと』東京学芸大学出版会

本稿に関連するホームページを参照されたい。

もじゃもじゃペーター博物館 <http://struwelpeter-museum.de/>

ゼンケンベルク自然博物館 http://www.senckenberg.de/root/index.php?page_id=5256

子ども博物館 <http://kindermuseum.frankfurt.de/>

ゲーテ博物館 <http://www.goethehaus-frankfurt.de/>

コミュニケーション博物館 <http://www.mfk-frankfurt.de/>